

(曾於郡末吉町二ノ方丸尾)

位置と環境

遺跡は、町の中心部から南へ約1.5kmのところ、標高約190mの台地上にある。

調査の経緯

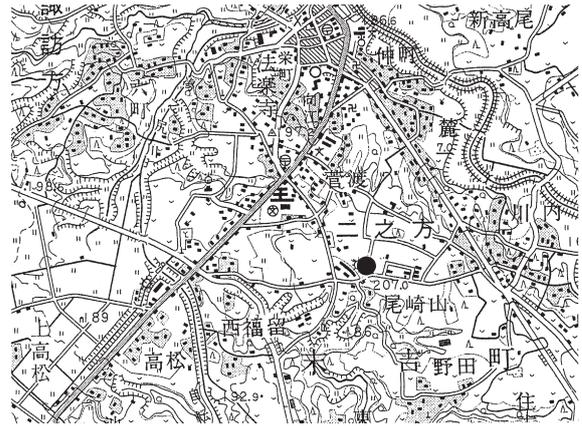
県教育委員会は、昭和47年度から58年度までの間に「大隅地区埋蔵文化財分布調査」を実施した。本遺跡は、その一環の調査で発見され、昭和55年度に確認調査が行なわれた。

遺構と遺物

遺物が包含されている地層は、Ⅲ層（暗茶褐色火山灰土）であるが、その下のⅣ層（暗茶褐色粘質土）には御池火山噴出と思われるパミス（軽石）が含まれており、Ⅵ層（黄褐色火山灰土）は鬼界カルデラ起源のアカホヤである。

本遺跡の遺物は、確認調査のために確認されなかったが、遺物は比較的多く出土した。

出土した遺物は、貝殻文を主とした文様構成される土器で、従来は縄文時代後期に位置付けられている市来式土器の範疇に入るものであった。しかしながら土器の特徴のある器形・文様構成などからこれまで市来式土器としていた土器群から切り離し、丸尾式土器（第2図1～5）として型式設定することとなった。本遺跡出土の丸尾式土器は、南九州の縄



第1図 丸尾遺跡の位置

文時代後期の編年上重要な位置をしめることとなった。宮崎県から鹿児島県にかけての九州東南部を中心に分布することと、西北九州の縄文時代後期の土器である西平式系土器（納曾式土器）（第2図6・7）とも共伴することなどが明らかになった。また、台付皿形土器（第2図8～11）も10点出土し注目されている。

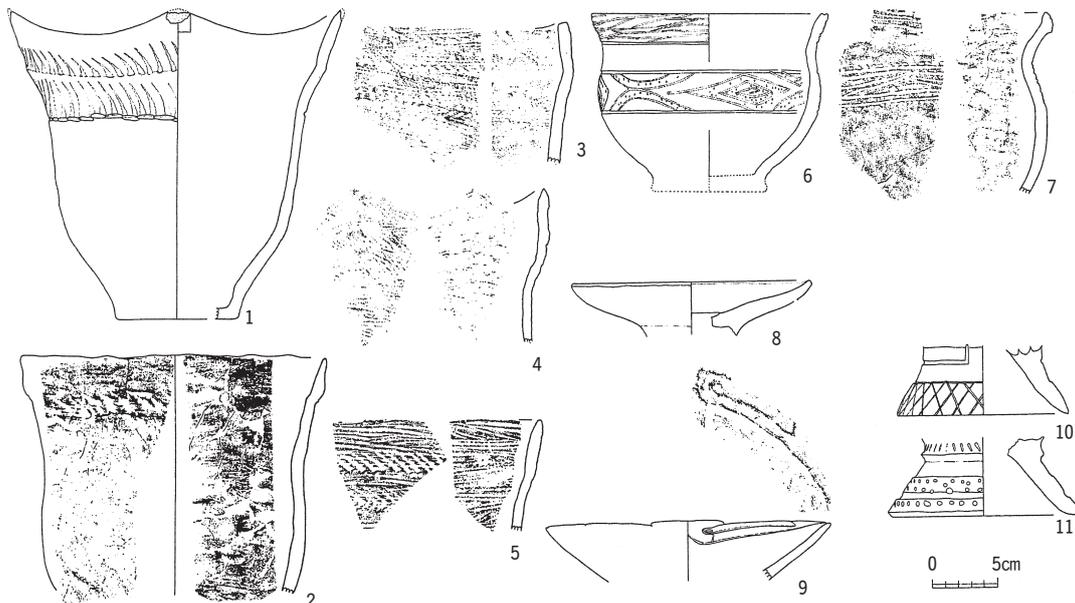
資料の所在

出土遺物は、鹿児島県立埋蔵文化財センターに保管されている。

参考文献

鹿児島県教育委員会1984「大隅地区埋蔵文化財分布調査概報」『鹿児島県埋蔵文化財発掘調査報告書』29

(中村耕治)



第2図 出土遺物